

「きき」方の姿勢

「きき」は「聞く」と、何気なく用いてはいないだろうか。
①「物音を聞く」「見るもの聞くものすべてが珍しい」「鳥の声も聞かれない」など、音・声を耳に

④「道を聞く」「自分の胸に聞け」「彼の都合を聞いてみる」などの解説が辞書を引くと出てくる。だが、門構えに耳が入っているからなのか、相手の言葉が門構えの扉にあたると、そのまま跳ね返って、耳には届かないことがある。

自分勝手に都合よく「聞き流す」という人がいる。

自分にとって必要なことだけしか聞かないという「きき」方の姿勢は、平素からの癖(「習慣」といっても過言ではない)。

相手は聞いてくれていていると思っ
て話をしたのだが、言わんとすることに耳に傾けているのではなく、耳では聞きながら全く別のことを考えている人もなかにはいる。

「聞き名人」

真剣に話を聞く人は、首を振ってくれたという印象が残る。

なかには、「きき」振りをしていように見せかけて、首振りのパフォーマンスを巧みに操る「聞き名人」と呼ばれる人がいる。

受容の印の表れとして頷いたわけではないが、相手には理解してもらえたと勘違いをさせてしまうような「聞き方」もある。

頷く側にも、角を立てたくないとの考えもあるのだろう。

また、いく度も同じ話を繰り返して聞かされてしまうと、「もう(聞き飽きて)懲り(り)」とでも言ってしまうようになる気持ちを抑えつつ、否も応もなく首を大きく振ってし

まう人もいる。

取り繕って切り抜けるような、その場を凌ぐためだけの「聞き」。

後先見ることなく、その場限りの「聞き」。その場から逃れたいだけの「聞き」などもある。

縦に首を振り続けながら、その場を掻い潜ってきた人の話の聞き方と「聞き方」は、実に巧妙だ。

とはいえ、「きき」人の癖(「習慣」)は、「きき」方の意識を「聞き方」から垣間見ることが出来る。

ポイント、「相手との関係をどうすべきか、どうあるべきか」ということについて、「深くかわりを持ち続けたいと願っているのか、否か」といった視点からの考察を心がけることである。

「きき」という姿勢を見せたがるようにして、首を縦に振って大きく頷いているだけなのか。

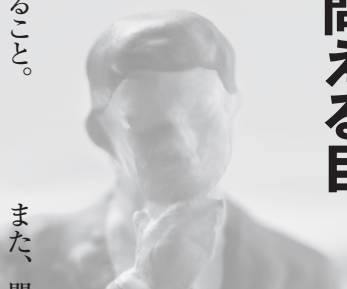
嘘も追従も世渡りとはばかり、安易な「聞き」が蔓延る現場は、下いびりの上詔いの中堅職員が、トップの前では競うように「聞き合う」光景を目にすることがある。

「聞き」の真贋を問える目を鍛えねば、東ね役は務まらない。

「聞き」方は、油断大敵。まだ早いが遅くなる。

転期に立つ経営の視座⑦

頷きの真贋を問える目



はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ! 経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

<http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

また、門は開いているものの、

必要なことしか門を通過して耳に届かないこともあるためなのか、

聞いているはずが、「聞き漏らす」

「聞き過ぎず」「聞き落とす」「聞き損ねる」「聞き遅える」など、話し

た側にとっては聞き捨てならぬ慣用句を耳にすることがある。

受ける。耳に感じ取ること。

②「聞くところによると」「君の評判をあちこちで聞いた」など、話を情報として受け入れること。

③「親の言いつけをよく聞く」「今度ばかりは彼の頼みを聞いて欲しい」など、人の意見・要求などを了承し、受け入れること。